

大学生の余暇観

加藤 純一

University Students' View of Leisure

Jun-ichi KATO

The purpose of this study was to examine the consciousness of leisure time. The findings were collected from a survey by the questionnaire on leisure through the college life. The subject were students who studied at Saitama Prefecture. The number of students was 525. (The male was 483, the female was 42.) The results were as follows.

1. The 83.2% students took interest in leisure time.
2. The 81.9% students thought of continuing the active leisure life from now on.
3. Lots of students recognized that the leisure was the time in which we have something to do.
4. Lots of students thought that they wanted to have something to do in leisure time.
5. Lots of students expected to make friends in leisure time and to become on good terms with their friends.

大学生の余暇観

加藤 純一

1. はじめに

平成4年7月、文部省の外郭団体である日本レクリエーション協会が養成した「余暇生活開発士」の第1期生が誕生した。この余暇生活開発士養成の狙いは、余暇時代の良き応援者として地域や職場での余暇のアドバイザー的な働きをする者や、趣味やスポーツ活動の助言ができるような指導者を育成するところにある。当初の日本レクリエーション協会が養成を始めた頃は、「他人の余暇まで口出しをするお節介者」といった批判がマスコミにでるなど、決して社会的にスムーズに受け入れられたわけではなかった。しかし、第1期生が誕生した後は、大手新聞社を始め公共放送等もこの話題を取り上げ、関心のあるところを示している。

ところで、「余暇」とはいったいどのような意味を持つのであろうか。「余(あまり)」と「暇(ひま)」の2字が結びついて作り出す「余暇」、「Leisure(レジャー)」の訳語であることは周知の事実である。「Leisure」の語源を遡っていくと、ラテン語の「Otium(オティウム)」とギリシア語の「Schole(スコレー)」に行き着く。オティウムは消極的な行為、スコレーは積極的な活動といった意味をそれぞれが含んでおり、その両者の概念を包括するレジャーには両者の意味が内包されていると言ってよい。この語源的アプローチからすると「余暇」は迷訳となってしまうが、時の日本の社会的状況、すなわちレジャーと常に二元論的に扱われる労働との係わり合いからすると名訳になるのであろう。「働かざる者食うべからず」「小人閑居して不善をなす」といった価値観が主流であれば、レジャーはまさに「余」「暇」なのである。しかし、今日の社会状況はかなり変化してきた。ここで歴史的な変遷を述べるにはスペースが足りないので省略するが、年間総実働時間₁₎をとってみても労働に対する意識が変わってきたことは明かなところ

である。労働意識が変われば、当然余暇に対する意識も変化してくる。つまり、社会状況に伴う時代に即した「余暇観」が形成されてしかりなのである。

さて、その時代に即した今日的な余暇観を明らかにする一手段として、筆者は大学生の余暇意識を明らかにすべく調査を行った。大学生というと、古今を問わずモラトリアムの存在として社会的には認知されている。社会に出る前の彼等は、アルバイトという疑似体験や、自分達の両親の働く姿からでしか労働というものを知り得ない。その労働観に対し、そこから彼等なりの余暇観も生じてきているはずである。彼等の余暇観が明らかになるということは、今日的な余暇観の一部が明かされると共に、次代の労働環境もある程度予測することができるのではなかろうか。

本論では、余暇に対するイメージを自由に記述させ、それを既存の余暇の分類に基づいて集計し、さらにそれを定量的見地と定性的見地から考察を行った。それらを通して、大学生の余暇意識の一部を明らかにしようとした次第である。

2. 方法

平成4年2月、埼玉県下の大学生を対象に余暇に関する調査を行った。調査方法等は以下の通りである。なお、調査結果の一部は、本論の中に表として挿入してある。

1) 被検者

今回の調査の対象は埼玉県にある大学2校の学生525名である。男女の比率は483:42である。

2) 調査方法

「余暇(レジャー)に関する調査」として被検者に調査用紙を配布。調査項目は、I「余暇」という言葉から最初に湧くイメージ、II「余暇」の捉え方(「余暇とは〇〇である」形式で自由に記述)、III余暇意識に関するアンケート、の3点である。

3) 分析方法

Iに関しては、定量的な見地からどのようなイメージに傾向するか分析を行った。IIに関しては、被検者が記述した10500を共通因子ごとに括る作業を行い、既存の分類項目ごとに分け考察を行った。IIIに関しては、被検者から得た五者択一の回答を分析し考察を行った。

3. 定量的データからのアプローチ

表-1

分類項目	数量	%
スポーツ・運動	27	5.2
社会的活動	3	0.6
社交的活動	5	1.0
教養・学習	7	1.3
休 養	51	9.7
娛 楽	42	8.0
遊 び	79	15.1
発 散	42	8.0
文化・芸術	0	0
生 産	0	0
野 外 活 動	0	0
そ の 他	268	51.1
計	524	100
(その他の内訳)		
非 拘 束 的	100	19.1
暇 な 時 間	22	4.2
楽 し み	47	9.0
必 須 的	36	6.9
有 効 的	9	1.7
意 志 的	9	1.7
積 極 的	6	1.1
生 涯 的	4	0.8
充 実 した 時 間	4	0.8
自 己 満 足 的	4	0.8
生 活 的	3	0.6
ゆ と り	2	0.4
金 銭 的	2	0.4
内 面 的	2	0.4
他	18	3.4

ここでは被検者 525 名の調査結果を定量的見地から分析し、大学生の余暇の捉え方、並びに余暇に対する意識を考察することにする。なお、調査した項目は次の 2 つである。

- A. 「余暇」という言葉から最初に湧くイメージ
- B. 余暇意識を調査するためのアンケート（五者択一）

イ. 余暇は自分の生活のなかで必要と考えますか。

ロ. 今後も余暇に関心を持つと考えますか。

ハ. 今後余暇を積極的に生活のなかに取り入れて行くと考えますか。

表-1 は調査 A の結果をまとめたものである。この結果から見てもわかる通り、大学生の余暇に対するイメージは多義に渡っており、特定の項目に有意な差を見ることはできない。表中の「スポーツ・運動」から「野外活動」までは既存の余暇の分類項目²⁾であるが、「遊び」の 15.2%を除いてほとんどのものが低い値

を示し、「その他」が51.5%と膨れあがっていることが特徴的である。これは、ある特定のものからの解放を余暇に望んでいると解釈できる。詳細は次節で考察したい。また、余暇を「遊び」と捉えるものも15.2%という値を示しているが、この内容を検討すると、「友人との遊び」「遊ぶこと」等、漠然とした意味で「遊び」という言葉を用いている。しかし、何を以て「遊び」と称しているのかはこの結果から推測することはできない。逆に言えば、漠然とした「遊び」というカテゴリで余暇を捉えているということが大学生の余暇の認識構造の特徴と言えるのかもしれない。なお、「その他」の中の個々の項目は、その内容から筆者が分類を行ったものである。

次に、Bの調査の結果について見てみよう。表-2はその結果をまとめたものである。

「余暇は自分の生活の中に必要と考えますか」という問に対し、97.3%の者が肯定的な回答を寄せ、否定的な回答は僅か1.2%という結果がでている。このことは、多くの学生が余暇の存在意義を肯定的に解釈していることと捉えることができ、ライフスタイルのなかで肯定的に余暇を位置付けていることを示していると言えよう。「今後も余暇に関心を持つと考えますか」の問に対しては、83.2%の者が肯定的な回答を寄せ、否定的な回答の者は2.7%という結果がでている。この数値は、裏を返せば現在8割近くの者が余暇に関心を抱いているということにもなる。今後とも継続的に関心を抱く者が多いということは、生涯教育の観点からしても喜ばしいことである。

表-2

イ. 余暇は自分の生活のなかで必要と考えますか

	A	B	C	D	E	R	G	H	合計	%
①	50	46	65	54	55	61	29	39	162	30.8
②	12	16	12	8	16	18	16	14	298	56.8
③	0	2	1	1	1	1	1	2	37	7.0
④	1	0	1	1	0	1	0	1	24	4.6
⑤	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0.8
計	63	64	79	62	72	81	47	57	525	—

ロ. 今後も余暇に関心を持つと考えますか

	A	B	C	D	E	R	G	H	合計	%
①	17	12	24	15	20	31	15	23	157	29.9
②	34	37	40	39	44	38	23	25	280	53.3
③	10	13	12	8	7	11	8	5	74	14.1
④	2	2	2	0	1	1	0	3	11	2.1
⑤	0	0	1	0	0	0	1	1	3	0.6
計	63	64	79	62	72	81	47	57	525	—

ハ. 今後余暇を積極的に生活の中に取り入れていくと考えますか

	A	B	C	D	E	R	G	H	合計	%
①	24	15	30	26	30	35	13	20	193	36.8
②	28	32	29	28	32	33	29	26	237	45.1
③	10	16	13	6	10	9	4	6	74	14.1
④	1	1	7	2	0	4	0	3	18	3.4
⑤	0	0	0	0	0	0	1	2	3	0.6
計	63	64	79	62	72	81	47	57	525	—

* A～H は調査対象の個々の集団を表している

** ①非常に考える②考える③どちらでもない④考えない⑤全く考えない

「今後余暇を積極的に生活の中に取り入れていくと考えますか」という問に対しては、81.9%の者が肯定的な回答を寄せ、4.0%の者が否定的という結果がでている。先の「今後も余暇に関心を持つと考えますか」の設問と合わせて考えてみると、この81.9%は現在余暇に関心を抱いており、今後更に積極的に生活の中に余暇を取り入れていこうと考えている者と判断する事ができる。以上、3つの設問の回答の結果をまとめると、大多数の者が余暇の必要性を感じてはいるが、その中の一部は現実的には余暇生活を営むまでにはいかないと考えており、また全体の8割近くの者が今後とも余暇に関心を持つと考えているが、その中の一部は継続的に接することには消極的であるということがわかる。

4. 定性的データからのアプローチ

ここでは、前述の定量的データを補う意味で、定性的データから大学生の余暇の認識について考察してみたい。定量的データでは、時に数字マジックにごまかされ、表面的な解釈に終始してしまう恐れがある。かといって定性的データが万能であるわけではないが、定量的データと合わせて分析を行えばより鮮明に対象が浮き彫りにされることは疑いのない事実であろう。

1) 定性的データとは

定性的データの収集や分析は、主に小集団のグループインタビューなどにおいて用いられる。このデータの特徴は、対象者の本音の部分を捉えており、非常に具体性を帯びていると言ったところにある。しかし一方で、偏った意見しか収集できないといった批判もあり、定量的データのような布行性には欠けるといったデメリットもある。例えば、余暇活動の動向調査をする場合、従来ではアンケート方式の調査が主流であった。この方法では、広範囲に渡ってその集団の情報を得ることができ、統計的な分析を通して特徴を見いだすことが可能であるが、それはあくまでも「浅い」情報にしか過ぎない。仮に「日本人の余暇の過ごし方は、欧米に比較して休息的な活動が多い」といったデータが何千人かを対象に得られた時、このデータにはそれなりの価値を認めることができるが、余暇を推進していく上ではもっと詳細な部分（年齢別、職業別、性別等の小集団毎のデータ）を必要とする。つまり、一般性は得られるが具体性に欠けるといったことが定量的データの中にはあるのである。ここにアンケート方式の所謂定量的データの限界があるのであろう。ある集団のより「深い」情報を得るためには、この方式では無理なのである。そこで近年見直されてきたのが定性的データの採取である。この方式には、先に述べたような欠点はあるが、逆にそれがその集団の特異な部分として認めることができ、「深い」ところでの情報を入手する事ができるといったメリットが上げられる。今日の余暇活動においては、個々人の趣味や嗜好も多様化しており、その人にあった情報を提供するにはより具体的にならざるを得ない。そういった傾向下で諸活動の動向を分析するには、対象をあらゆる点から限定し、同志向の集団を調査する必要性に駆られる。所謂属性が大切となってくるのである。また、調査内容もアンケート方式ではこちらの調査したい項目を設定することができるといったメリットはあるが、それ以上を聞き出すことはでき

ない。しかし「グループインタビュー」形式では、内容は多義に渡るが、生の情報を得ることが可能となってくるのである。

余暇は、あらゆる人が自分の嗜好において楽しむものである。したがって、一般的とか、不偏的といった言葉は不必要であるが、動向を調査する上では統計的に処理をせざるを得ない。その定量的データで漏れたところを補うものが定性的データであると言えよう。個々の集団の今の動向を知る上では非常に有効な方法と筆者は考えている。

なお、本調査では所謂「アンケート調査」方法をとらず、ある特定の調査項目に対して自由に記述させる方式を採用し、定性的データが得られるような形にした。この形では「グループインタビュー」形式で得られる情報より浅くはなるが、「アンケート調査」方式より細部に渡って情報を得る事が可能となると考えている。

2) 分析結果

表-3 は、本調査より得られた因子 10500 を共通因子毎に括る作業³⁾をし、既存の分類項目毎に振り分けた結果である。(最終因子数は 917)

ここにある 11 の項目は、日本レクリエーション協会発行の『余暇生活援助法』によるものであるが、今回の定性的データによる因子採取の結果では、個々の因子数が少なく、これらに含まれない「その他」の因子数が非常に多くなっている事がわかる。これは前述の「余暇という言葉から最初に湧くイメージ」の分析結果一致するところであるが、このことから、余暇の因子分析には特定の項目による定量的な処理には限界があることが窺える。

さてその中でも、「社交的活動」の因子数 62 というのは注目に値する。この内容を見ると「友人と話し合える時間」「友人と精神的なつながりを持

表-3

スポーツ・運動	49	休養	57
文化・芸術	7	娯楽	71
野外活動	14	遊び	11
社会的活動	12	発散	11
社交的活動	62	創作	3
教養・学習	38	その他	582

つ事」「友人と友情を深める事」など、人との交流を余暇に求めている事がわかる。また、「人間関係を作るもの」「人との和を広げるもの」のように、新たな人との出会いを求めている因子も見られる。これらからすると、余暇生活の中で人的交流を通しコミュニケーションの幅を広げたいとする意識を窺うことができよう。

次に、数量的に多い「その他」の項目について見てみよう。この部分を表一1の「その他」にある項目毎に分類してみると、その数は次のようになる。「非拘束的：35」「暇な時間：10」「必須的：10」「有効的：4」「意志的：7」「積極的：3」「生涯的：3」「充実した時間：4」「自己満足的：2」「生活的：33」「ゆとり：3」「金銭的：9」「内面的：92」「他：367」。この内訳を見てもわかるように、「内面的」が数量的に多いが、他項は少ない。したがって、定量的見地からすると「その他」の項の中では「内面的」な因子に有意な差を認める事ができる。しかし、一方で「他」の因子がなおかつ多いことが気になる。この部分の分類化は今後の課題と言えよう。なお、「その他」の各項の因子内容の抜粋を表一4に表しておいた。

表一4

非拘束的	因子番号	
アフターファイブ	L	351
解放される時間	L	355
型にはまらない時間	L	356
干渉を受けない時間	L	357
義務から解放される時	L	358
拘束期間に対する猶予期間	L	361
責任から解放される時間	L	367
ネクタイを外した瞬間	L	369
羽を伸してゆっくりとすること	L	377
他人に強制されないもの	L	383
暇な時間	因子番号	
余った暇な時間	M	386
退屈な時間	M	387

楽しみ	因子番号	
一時的快樂	N	388
自分が一番楽しい事をしている時	N	389
週2回の楽しい時間	N	390
楽しい時間	N	391
楽しむ時間	N	392
楽しいもの	N	393
楽しいという感情だけではないもの	N	394
人生を楽しむために必要な事	N	395
うきうきするもの	N	396
それ自身が楽しいもの	N	397
必須的	因子番号	
これから増やさなければならぬ時間	O	398
大切にすべき時間	O	399
人間が必要とする時間	O	400
やらなくてはならない事	O	401
大切なもの	O	402
人間に絶対必要なもの	O	403
日頃から関心を持つべきもの	O	404
必要なもの	O	405
人として必要なもの	O	406
不可欠なもの	O	407
有効的	因子番号	
時間を有効に使う事	P	408
自分の時間を有意気に使う事	P	409
意味のあるもの	P	410
有意義に使うもの	P	411
意志的	因子番号	
必ず持ちたい時間	Q	412
考えを実行に移す時	Q	513
自分の好きな事をする時	Q	414

やりたくない事をやらなくて良い時間	Q	415
やりたい事ができる時間	Q	416
意識的に過ごすもの	Q	417
意志目的を明確にする事	Q	418
積極的	因子番号	
個々人の積極性が問われる時間	R	419
積極的に何かをする事	R	420
積極的に参加しなければならない事	R	421
生涯性	因子番号	
生きがい	S	422
一生のテーマ	S	423
ライフワーク	S	424
充実した時間	因子番号	
愛を育む事ができる時間	T	425
今を大事に使える時間	T	426
充実した時間	T	427
充実感を味わう時間	T	428
自己満足的	因子番号	
自分にとって幸せな時間	U	429
自らが主人公になれる時間	U	430
生活的	因子番号	
仕事から切り離れた生活	V	433
生活の中の重要な部分	V	438
生活の潤滑油	V	439
生活が一時的に止まる事	V	448
型にはまった生活から抜け出すもの	V	452
生活の匂いのしないもの	V	455
生活に負担を与えないもの	V	458
生活にメリハリをつけるもの	V	459
生活レベルを向上させるもの	V	462

人間の生活のなかで必要なもの	V	463
ゆとり	因子番号	
見聞を広めるための時間	W	464
ゆとり	W	465
夢をかなえる為の時間	W	466
金銭的	因子番号	
気がねせずお金が使える時間	X	467
実益を兼ね備えた時間	X	468
収入のない時間	X	469
お金との相談	X	470
お金を稼ぐ事ができるもの	X	471
お金がかかるもの	X	472
お金がないと楽しめないもの	X	473
お金では買えないもの	X	474
商売になるもの	X	475
内面的	因子番号	
心のときめく時間	Y	485
自己を磨く事のできる時	Y	493
自分の知らない面を知る時	Y	503
自らの質を高める時間	Y	510
心の隙間を埋める事	Y	518
自分の視野を広げる事	Y	526
精神の安定を得る事	Y	531
鋭気を養えるもの	Y	541
自主的に行動するもの	Y	550
自分の限界に挑戦できるもの	Y	556

ここで、「非拘束的」因子と「内面的」因子について考察してみよう。非拘束的因子には、「ネクタイを外した瞬間」「アフターファイブ」のように、一時的に仕事から解放されるものから、「定年で会社を去った後の時間」のように仕事自体から解放されたもの、「拘束から解放される時間」「制限か

らある程度解放される時間」のように、ある特定の行為から解放されるもの等、多方面に渡っていることが窺える。しかし、全体的にみると「時間」からの解放という面が強く見られ、時間的に拘束されているものからの解放を余暇に望んでいるということが言えよう。また、「その他」の項には、「非拘束的時間」以外に「充実した時間」等の時的因子が41含まれ、調査全体では211の時的因子を数える事ができる。これは総因子の22.6%に当たることから、余暇を時的事象で捉える傾向にあるとも言えよう。なお、「その他」の項には見られないが、「遊び」などの活動的因子は全体で152あり、総因子の16.3%に当たる。因子の内容が多義に渡るなか、この時的因子と活動的因子は各項目の枠を越えて有意差を認める事ができる。

内面的因子には、「自主的に行動するもの」のように余暇を私的なものとして捉えているものや、「精神の安定を得ること」「鋭気を養えるもの」のように余暇に安住を求めているもの、「自らの質を高める時間」「自分の視野を広げる事」のように余暇を向上の手段として捉えているものなどが見られる。余暇生活は他人に強制されて行うものではない。個々人のそれぞれの思いが発露される場である。この項目の因子数が多いということは、それだけ余暇に対して自己のアピールを求める態度があるとも言えよう。

次に、調査結果全体を通して気になる因子を取り上げ、分析してみる事にする。第1は「仕事関連」の因子についてである。余暇はよく仕事と対比されて述べられ、両者は二元論的に扱われることが多い。今回の調査でも仕事との関連で述べられた因子も少なくない。表-5はそれらの因子を抽出したものである。

表-5

仕事関連の因子	因子番号	
仕事の合間の安らぎ	H	214
仕事の疲れを癒すもの	H	257
仕事から切り離れた生活	V	433
家庭内の仕事をする事	V	446
仕事と仕事の間の空白の時間	Z	634
仕事中に憧れている時間	Z	635
仕事を減らしてでも持つべき時間	Z	636

仕事をする上での糧	Z	637
仕事への活力	Z	638
仕事と同様人間の生きざま	Z	639
仕事と直接の接点を持たない活動	Z	640
仕事のためのゼンマイを巻く作業	Z	641
仕事と表裏一体	Z	642
仕事より大切なもの	Z	817
仕事に影響を与えないもの	Z	818
仕事のバランスによって変わるもの	Z	819
仕事と対をなすもの	Z	820
仕事がなくでは成り立たないもの	Z	821

このなかでは、「仕事をする上での糧」「仕事への活力」など、仕事を主体とし、余暇をその副次的なものとして捉える因子が見られる反面、「仕事より大切なもの」「仕事を減らしてでも持つべきもの」といった、余暇を主体的に捉えている因子も見られる。『レジャー白書'91』⁴⁾によれば、平成2年の「仕事と余暇のどちらを重視するか」という問に対し、32.7%が余暇重視派、28.4%が両立派、37.9%が仕事重視派という回答がでている。「仕事と表裏一体」「仕事と対をなすもの」などの両立的な因子数が少ないのはこの数値と一致するところなのであろうか。

第2は「場」である。余暇をある特定の行為をする場と捉えている因子も少なくない。余暇を時空間的に捉えるならば、当然空間である「場」と捉えた因子も存在してくる。表-6は「場」として捉えている因子を抽出したものである。

ここでは、全体的にある事を行う「機会」としてのニュアンスが認められる。内容的には、「学習の場」「生活に潤いを与えてくれる場」のような個人的なもの、「仲間を作る所」「友人との語らいの場」のように人との交流を促すものの2つに大別できよう。また、「休息の場」以外は積極的な内容の因子であり、その意味からすれば、余暇を自ら切り開いて何かをする場（機会）として捉えていると言えよう。

表—6

場	因子番号	
地域活動の場	E	97
社交の場	F	112
出会いの場	F	115
仲間を作る所	F	118
友人の隠れた性格を見つける場	F	129
友人との語らいの場	F	130
学習の場	G	175
人に物事を教えてもらえる場	G	204
休息の場	H	211
自分の趣味を増やす場	I	273
人間成長の場	Z	700

5. おわりに

現在、わが国では時短への取り組みが休息に進み、政府の経済5ヵ年計画や経済審議会生活大国部会などでは年間総実労働時間1800時間を目標に掲げ、その早期実現を目指している。また、政府は「生活大国5ヵ年計画」で早期に週40時間の労働時間の実現をうたい、「労働基準研究会」はその週40時間制を猶予措置や特例措置を前提として実施するという報告書をまとめている。このような行政側の促進態度は、日本経済団体連盟（日経連）等の反発も招いてはいるが、いずれにしろ官民一体となって労働環境の問題に取り組んでいく事が今の時期必要となってこよう。また、労働時間が短縮されれば、当然余暇時間が増加してくる。この余暇時間を有効に活用する術を持たないと、労働主体の生活に流され、時短促進を鈍らせることにも成りかねない。事実、先にも紹介した『レジャー白書'91』では仕事重視派が37.9%もいるという調査結果がでていいる。時短の促進は、単に労働時間の短縮といった表面的な調整におおらず、確保できた余暇時間を有効に使えるような環境整備をも包含したレベルで捉えていくべきと考える。

さて、本稿では大学生の余暇観を定量的、定性的見地から考察を行ってきたが、総合的に見ると、「余暇生活」に対しては積極的な姿勢を示し、ま

たその関心度も高いという事が言える。しかし、具体的な内容となると、実践的な活動因子は少なく観念的なレベルでそれを捉えている傾向にあると言えよう。これは、被検者である大学生がモラトリアム的な立場にあり、実社会の労働というものを肌で触れることができず、疑似体験や見聞でしか知り得ないということに起因しているものと推察できる。一方、継続的に関心を持ち続けたいとする者も多い事から、実社会に出てからの余暇生活は、現在の余暇生活の延長上で捉えようとする傾向にあるのではないかと考えられる。すなわち、彼等が抱えてい余暇生活と現実のものとの間にギャップが生じた時、学生生活の間に培われた余暇観を優先し、実社会での生活を否定する可能性が高いのではないかとと思われる。定性的データの中には、「国を挙げて取り組む問題」「日本人がこれから真剣に考えていく問題」「日本人の苦手な分野」「日本に欠けている問題」「大人にこそ増やしてもらいたいもの」「欧米に比べて日本が足りないもの」等の因子が見られた。現行の社会状況に流されず迎合しないと云った彼等の意識を、このデータの裏側から読みとるには無理であろうか。日経連労務管理部長の浅井氏は、「中小企業は常に人手不足です。特に若い人がほしい。労働条件をよくしていかないと人は集まらないんです。いまどきの若い人は、完全週休2日制じゃないとイヤダという。(略)リクルート対策として、時短は重要だし、自ずとすすむと思います。」⁵⁾と述べている。大学生(次世代の労働者)の余暇意識は、十分に労働環境を変える力を持っていると言えよう。

最後に、今後の研究課題について述べておくことにする。第1に、本稿でも数度触れたが、現行の余暇活動の分類には限界があり、この尺度で余暇意識を分類していく事には抵抗を感じる。定量的データを用いて今日的傾向を明らかにしていくことの必要性からも、既存の分類の見直しを図りたい。第2に今回の調査で得られた定性的データの再検討である。今回はスペースの関係で一部の事例の紹介で終わってしまったが、取り上げられなかった事例の検討を早期に行いたいと考えている。第3に調査範囲の拡大である。大学生の余暇観をより一層明確にするためには、他集団(職種別、年齢別)との比較が必要となってこよう。早期に実施したいと考えている。

— 註 —

- 1) 平成 3 年の日本の年間総実労働時間は 2016 時間、平成 4 年では 1972 時間となっている。
- 2) (財)日本レクリエーション協会人材開発本部編集『余暇生活援助法』日本レクリエーション協会, 1992 による。
- 3) この作業では、共通名称の因子は 1 つとしてカウントされる。
- 4) (財)余暇開発センター編集『レジャー白書 '91』, 余暇開発センター, 1991, 7 頁。
- 5) (財)日本レクリエーション協会『REC レクリエーション 11』, 1992, 15 頁。